



今、ボランティアセンター担当者にとって大切なコーディネート力。企業との連携、福祉教育の推進、そして災害ボランティアなど、地域の課題に協働で取り組むため、コーディネートが重要になっています。ボランティアセンター担当者が押さえるべきコーディネートのポイントを連載で紹介します。

NPO法人ハンズオン埼玉
常務理事

にしわ 西川 正 さん

学童指導員、出版社等を経て、2005年ハンズオン埼玉を設立。「おとうさんのヤキモタイム」翔んでさいたまスクキャンペーンをはじめ、さまざまな市民参加型企画プロジェクトに関わる一方、まちづくりや子育て支援の研修等の講師やファシリテーターとして活動。PTA、民生委員など地元での活動多数。元恵泉女子学園大学特任准教授。今年3月末までNPO法人日本ボランティアコーディネーター協会理事。著書に「あそびの生まれる場所〜お客様、時代の公共マネジメント」(ころから刊)。

第4回 図解! 「やってみよう(自発性)」の正体を探ってみた

「はい、中学生〜! こっちの椅子を運んで〜」

私の住む団地は高齢化率が50%に近く、夏祭りのお神輿も担ぎ手がいません。そこで中学校に「ボランティア」という名の動員を依頼。なので朝、現地に来た中学生くんたちのやる気は…。他方、運営とはいえ、作業の中身がすべてあらかじめ決まっておき、結果、冒頭のセリフのような指示語が飛び交いがちです。地縁の活動ではこんな風景をよく見ます。

中学生の「おもしろかった!」の理由

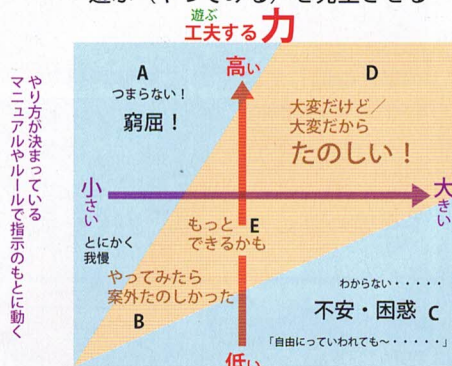
少し前、多文化交流がテーマのイベントを開催しました。地元に住む外国人ルーツの方々(PTAのお母さんなど)に民族料理のお店を出店してもらって、「地元にいるんな人が住んでくれてよかった」を味覚から感じてもらうというものです。私が担当したコーナーは、五輪ならぬ「七輪ピック」。お客さんに七輪で自分でおせんべいを焼いてもらい、世界各国のディップ(メキシコの辛いタコスソース、リトアニアのマヨネーズ…)を自由につけて食べてもらうという企画です。3人の中学生が「七輪ピック」担当で来てくれました。朝、自己紹介のあと、このコーナーのねらいを伝えます。「せんべいを売ってというより、とにかくお客さんと楽しい時間をつくりたいのね。やり方はみんなにまかせるから、失敗してもいいので、やってみて〜。困ったことがあったらいつでも相談してね」。

3人は、最初こそとても硬い表情で、「まかされても〜」とまどい気味。それでも、お客さんから「これはどこの国のもの?」と聞かれると、瓶の前に国名を書いた札をつくって置いたり、「このメキシコの辛いディップ、案外せんべいにあうわよ」と聞くと、その感想をポップに書いて貼り付けたり。団地のおばちゃんたちとやりとりをしながら工夫を重ねるうち、「世界のディップつけてみよう!」と自作の看板をつくり、

お客さんにおすすめを語っていました。夕方、感想を聞くと、満面の笑みで「たくさんの方に声をかけてもらって、おもしろかったです! またやりたい!」。

きっかけは動員でも、そこに「安心」と「工夫の余地」があれば、「やってみよう(自発性)」が生まれてきます。「言われたとおり、決まったとおり(前年どおり)」ではなにも生まれません。また、逆に何も決まっていなさすぎて、人は立ちすくみます。これを図にしてみました。

ちょうどいい「余地」があることが遊ぶ(やってみる)を発生させる



「おもしろい」の正体とは?

その人(または組織)に工夫する力があれば、ルールやきまりごとは少なく、工夫の余地が大きいほうが「楽しい」になりやすい(D)。しばると窮屈だと不満が出る(A)。しかし、持っている力以上に求められると、「どうしていいかわからない」=「不安で動きが止まる」(C)。その「ちょうどいい」を狙って、活動(プログラム)を準備(図の左に移動する)すると、「これならやってみよう」との気持ちになります(C→B)。

人は、「やってみたら案外おもしろかった」や、「もっとやってみよう」、そして「できるかも」となります(B→E)。一足飛びが無理なら、小さなステップを用意すると、「やってみる」と「できた」の両方が体験でき、それが「もっとできるかも」につながります。ただし「やってみる」のなかには、必ず「うまくいかない」失敗が含まれます。その失敗を許容

し(待ち)、不安や疑問に答える、すなわち安心を保障すると人は自ら動き出します。結果のわからないことをやってみるというドキドキが、「おもしろい」の正体です。

次の担い手が見つかる組織とは

被災地などで、ボランティアセンター(ボラセン)が整備され、ルールやしきみをつくると多くの人がかかわることができます。しかし、あらかじめ決まっていることばかりになると、自発的な動きは減っていきます。かつて大学生は、勝手に自分の興味にあわせて、地域に飛び込んでいきました(その分、大きな失敗も)。今は、地域に出ることを怖く感じる学生が多数。そこで、大学にボラセンが必要になります。その学生にとっては、いきなり

(D) ねらいがいいのか、それとも(B) からのいいのか、を見極めつつ、活動先を探したり、自らプログラムを企画したりしているはず。また、団体側でこのことを気にしてくれる人(コーディネーター)がいれば、多様な学生が送り出せます。

地域には、地域のために自分が動くことが大好きな人はたくさんいます。しかし、上手に他人に仕事(工夫の余地)を残しておける人は少ないです。地縁系の活動が世代交代しにくいのは、このためです。地域は「正しさ」が先に立ちがちですが、同時に「楽しさ、おもしろさ」に気を配ることが、メンバーの自発性を膨らませます。自分が体験しておもしろかったら、友達を誘ってくれます。今やっている人(役員さん)が楽しくやれているかどうか、次の担い手が生まれるかどうかを決めるのではないのでしょうか。

